

## バルカン諸國の歴史産業交通の概況 (三)

H T 生

### 希臘の歴史産業交通の概況

本誌は二回に亘つて連載した「バルカン諸國の歴史産業交通の概況」もギリシヤとアルバニアを以て終結するのであるが茲にギリシヤを書く前に一體バルカン諸國の年齡を見ると、バルカン民族の解放は彼のナポレオン戦争時代から始つてゐる。これには先づセルビアとクロアイトとの比較的自由なる國境區域の農民に依つて立ち上り更に二十年代にはギリシヤがその獨立を獲得したのであつた。ルーミアの領域は幾部分は獨立状態にとどまつて、纏て露國の保護支配下に陥つたが千八百五十四年から同五十五年に勃發したクリミア戦争後に於て再び露國の支配下から脱却

したのである。併乍らルーミアの國家は長い間混沌裡に形成されてゐてその完全なる獨立は千八百七十八年の伯林會議で認められたのであつた、又十九世紀にセルビアと同様に國民運動を興したブルガリアはその解放をさし當つて獨立までには至らなかつたが、千八百七十七年から同七八年に亘る彼の露土戦争に原因してゐる、而してブルガリアは幾分の制限はあつたと云へ近代國家としての獨立をこの戦争の結果再びかも得てゐる、ナポレオンの時代にはユーゴスラヴィアの中核が解放されて既に土耳其の支配時代には可なりの自治制が敷かれて居たのである。又ルーミアの歴史はそれ以上に古いが土耳其人の下で一種の支配者の役割を持つてゐたが、ギリシヤ人もまた同様の状態に

置かれて、ギリシャ・カトリック教會の僧正や或る官職を持ち其後は徵稅吏や取引者として默認されてゐたのであつた、思へば羅馬帝國時代に高い文化水準に達したアドリア海東海岸の素晴らしい土地ダルマチアは既に紀元前千年頃はヴェニス領となつたが千百年頃には洪側に奪はれ、更に千四百二十年頃には再びヴェニス領となつてゐる。

その時から千七百九十七年のカンポフォルミオの平和までヴェニス領であつたが、其後オーストリア領となり、曩の世界大戦後はユーゴスラヴィアの一部となつたのであつた、要するに羅馬帝國が亡びて以來バルカン半島は一應土耳其に依つて統一されたのであつたが、その間に於て毀した物は多量にあるが建設したものに付ては只だ單に回教の寺と城塞以外には何物もなくその荒寥たる風景は更に一段の哀愁を感じしむるものがあつた、斯くしてバルカンは中世の儘の姿にて十九世紀を迎へたのであつたが、バルカン半島が近代の政治的鬭争に最も活潑なる動きを示したのは十九世紀の中葉以後であるこの頃の歐洲は民族と自由と

の渦卷の裡にあつたが、殊にバルカン地方に住むキリスト教徒は回教徒たる土耳其の羈絆を脱せんがために民族の自由解放を叫んでその風潮に乗つて、歐洲列強の勢が争鬭の機會を利用してアジアに對する報復の闘ひに専念して、それが千八百三十年のギリシア獨立となり其後に於てセルビア・ルーマニアの解放となり更に第一次歐洲大戦後の塙洪帝國の分解作用となつて現はれたのである。然るに歐洲大戦以後のバルカン諸國の情勢は民族國家として比較的鞏固なる基礎の上に起ちて土耳其處分の問題が解決し、又スタンプール海峽の通航制度は海峽協約に依つて一應の解決を見たのである、殊に大戦以前に於いてバルカンに最も緊切の利害を感じてゐた露、塙兩國が國際政治の活舞臺から退いたことはバルカンの政局に一大變化を與へたものであつた、併乍ら尙ほ幾多の問題は將來に殘されて他日列強勢力の消長につれて動搖が免れない情勢にあつたのである。即ち蘇聯政權がスタンプール海峽を列國軍艦に開放する現制度に反對して黒海から地中海に通ずる鏈を自由の手から奪

はれない意圖であり、又伊太利政府がブルガリア及びバルバニアを懐柔するのは畢竟隣邦のユーゴスラヴィアを孤立せしめんがためであり、佛蘭西がルーマニア・ユーゴスラヴィアを支持して、英國が土耳其及びギリシアを擁護する政策を固持するのも結極歐洲の勢力均衡を目標とする自己防衛的外交政策の發露であつた。

然るに今次の歐洲大戰は昭和十六年四月六日にヒットラー總統のギリシヤ及びユーゴスラヴィアへの進撃命令はバルカンの情勢を忽ちにして一轉せしめたのであつた。

殊にユーゴ國の對獨降服は著しくギリシヤ軍の戰意を銷沈せしめたのである、當時サロニカ方面には濠洲軍及びニュージランド軍の大部隊が参加して希臘軍を援助してゐたが英軍はサロニカの陥落と共に後退して、ギリシヤ軍と共に最後の防備線であつた。中部ギリシヤのオリン波斯山脈周邊の防備陣地で死守しやうと勉めたが昭和十六年四月十八日には遂にこの防備陣地も獨軍に抜かれて更に翌十九日には南方の據點ラリツサも陥落したのであつた、他方伊太

利軍はアルバニアに進出中の希臘軍を擊退してその國境を突破しギリシヤに侵入して、ギリシヤ軍の左翼に強壓を加へ以て獨伊兩軍のギリシヤ進攻の大勢は既に決して以後は追撃殲滅の一方的の戰鬪となつて、獨軍はテツサリヤ平野を南進して更にラミヤ・ヤニナ等の基地を占領し、ラリツサ南方の港である英軍退却乗船地たるヴォロス港をも奪取したのであつた、又北方ギリシヤのマセドニア及び西北方のエピルス方面で敗戦して、中央軍との聯絡を斷たれたギリシヤ軍は獨伊兩軍に對して無條件降服に出で、更にテツサリヤ方面のギリシヤ中央軍は彼の有名なるテルモピレの峠に依つて頑強に抵抗したが、獨逸機甲化部隊と急降下爆撃機との協力突撃に壓せられて首府アテネ方面に敗退し遂にギリシヤ國王並に、政府は昭和十六年四月廿三日に至つて、クレタ島に亡命したのである。

かくて獨逸軍は希臘文明の搖籃地たるアテネに對してはその破壊を懼れて爆撃を見合せ又アテネの港たるピレウス及び其他の港灣に對しては乗船脱出の英軍を殲滅のために

空襲を續行して、アテネは無血占領して、茲に獨伊兩軍の希臘本土戦は終了すると共にギリシヤは遂にその領土を失つたのである。當時ヒットラー總統の獨逸國會に於て希臘に於ける戦果の報告を見ると。希臘ユーゴスラヴィア兩國の捕虜五十六萬二千、英濠、ニュージールランド捕虜九千餘獨逸側の死傷は五千四百である。而してこの戦争に獨逸の用意したる兵力量は獨軍は三十二個師團であつたが、この大軍の編成は僅かに一週間で完了して實際戦團に参加せる兵力は廿一個師團に過ぎない尙ほギリシヤ派遣の英近東軍は六萬にて内四萬五千がクレタ島其他に無事撤退したと云つてゐる。かくて獨逸はギリシヤとユーゴスラヴィア兩國を撃破して、茲にバルカンの制壓を完成したのであるが引續いて、昭和十六年五月廿日に愈々クレタ島の攻撃を開始して、その攻撃戦は落下傘、グライダー、輸送機を使用して兵員、武器、彈藥、食糧品等を敵地に輸送して獨軍もギリシヤ英兩軍と共に背水の陣を布き所謂死闘したのであつた。獨軍は最初に於ては苦戦であつたが、獨輸送機が落下傘で砲一門づ

つ下降して砲兵隊を組織すると急降下爆撃機は重砲隊の任務を勤めて、英軍陣地を次々に粉碎してゐる間に伊太利艦隊が参加して攻撃力を増加し、以てクレタ島も遂に同年の六月一日に至つて獨伊兩軍の手に歸したのであつた、當時チャーチルはクレタ島戦は飛行機を持たない英軍と砲を持たない獨軍との血闘であると云つたのも今日敵ながらも全くその通りであつたのである。而して最後にこの希臘のクレタ島の攻略は伊太利海軍に基地を提供し、又他方獨伊兩國の空軍が基地を置くことについて獨伊樞軸側の近東並に北阿等に對する作戰上極めて有利なる形勢を招致したのである。

希臘は今次の歐洲大戰においてかゝる運命を辿つたが、先づ希臘と云ふ國を地理的に見ると、この國は東は土耳其との間にエーゲ海を抱擁してそこには大小約二百餘の島嶼が点在して丁度小亞細亞に達する自然の飛石の形をして居る、この意味からしてエーゲ海は別名多島海とも呼ばれてゐるが地中海との境をなす所に最大島である希臘政府の一

時亡命したるクレタ島がある。西はイオニア海を隔てて、伊太利半島に對峙して、その海岸近くにはイオニア諸島がある、北部は土耳其領の東トラキアとブルガリア・ユーゴスラヴィア及び最近伊太利に併合されたアルバニアと境を接してゐる、而して半島はコリント灣を境として天然的に二分せられて其の大部分を占める北部は更にテッサリア地方と中央のアルメリア地方とに分れて居る。この地方は殆んど全部山地や丘陵に覆はれて北部から來るピンドス山脈が背景をなして又その支脈は東西に走つて最終は海に迫つてゐる、故に斷崖や深谷を形成して、その間を縫ふて凡そ幅二間乃至一間半位の道路が通じて居るが深谷に架設されてある橋梁は多くは鐵筋を以てなしコンクリートを以てかためて相當立派のものがある。木造橋もこの山間道路には相當架設されてゐるがこの地方の道路は勿論鋪裝道路ではなく貨物自動車が漸く通行出來得る程度である、東方はサロニカ灣に近く二千五百九十八米突のオリムポス山の高峰は高く空に聳え、その海に接するところに有名なテムペ

の天險が横はつてゐる。カルキディケ半島によつて形作られたサロニカ灣は希臘の最も必要なるところであるが、こゝにギリシヤ第二の都會サロニカがある、このサロニカは嘗て此方のユーゴスラヴィアが多島海への出口として多年この港に注目したところであるが、これ迄武力に懇へてまでギリシヤから奪ふ計畫までも持つて居なかつたのである、サロニカ市街の道路は希臘として國內第二の都會だけあつて市内は鋪裝はされて居り主要市街道は近代道路としての價值を持つて居る、このサロニカを中心として道路は約四路線程四方に通じてゐる。半島の南部はコリント灣に依て中斷されてペロポネソス半島となつてゐる、元來このコリント灣は千八百九十三年に於て同灣の東端地峽に運河が開鑿されてからエーゲイ海とイオニア海とを連ねる交通の重要航路となつて同時にモレア半島は島となつたのである、中央はアルカディア平原は盛なりし昔時の面影がなく又別に顯著なる港灣や都市もなく發達もせず、唯だ南方山地に彼の往古スパルタの故都や西岸にはオリムピアの

古跡などあるのはせめては往時ギリシヤ文明旺盛を忍はせるものがある。氣候は所謂地中海型氣候帯に屬して、溫和を缺き首都アテネの一月平均氣溫は緯度の上では三度北に在るマルセーユから僅かに八度六の高さで結霜することもある、冬季はペロポネソス半島の南に低氣壓が起つて北風を誘發して平均最低氣溫零下一度六に達して降雨量も多量である、夏季五ヶ月間の平均氣溫は二十度を超へてゐる、而してかゝる氣候が希臘の各種作物の生産に適してゐるか就中煙草と葡萄の耕作には最も良く土壤もまた肥沃である。大體希臘の地勢位置はかやうのところであるが希臘人はバルカン半島の諸國中に於ても最も商才に富み且つ其の地理的關係から海運に従事する者は多く従てギリシヤの所有船は戰前約百八十餘萬噸を持つてバルカン諸國が海上輸送は全く外國船に依存するに拘らず自由船を利用して、バルカン沿岸の覇者である、殊にヒレウス、サロニカの二港が主要港として活躍し海上交通は頻繁である。而してその商權は近東及び地中海方面に擴大されてゐる、ギリシヤの

鐵道はモレア半島の約半徑を回ると首都アテネからサエニアを走つてユーゴスラヴア方面に入る線が布設されて居るが大體鐵道總延長線は二千七百餘軒となつてゐる、また河川交通は他のバルカン諸國とに比較すると劣つてゐるがドナウ河は國際河川となつてゐる。

更に希臘の産業を検討すると元來この國は國土の半分以上が不毛の地であるに拘らず耕作面積は全土の約一割五分に該當するの貧弱なる上に僅少面積の上に七百萬の住民を包容して人口は頗る稠密してゐる。然るに國民一般の生活水準は他のバルカン諸國の住民に比較して遙かに高準を示して農民の如きでもパンを常食して居る位である、殊に都市生活をなす約二百萬は西歐諸國と同程度の生活水準を維持して居る、煙草と葡萄はこの國の主たる農産物であるが、統計の示すところに依ると十一萬エーカーの耕地から價格に於て三十五億ドラクムの煙草が採れ、六萬五千エーカーの土地から價格十億ドラクムの葡萄が收穫出来る程氣候と土壤肥沃がこれに適してゐる、故に生産業は主として

煙草の輸出であるが總輸出の四割五分を占めてゐる有様である、希臘は食料と原料を輸入して煙草と乾葡萄酒とを輸出してゐるが、この外に金屬類と石炭石油等を外國から輸入してゐるがこの率は總輸入額の約一割に該當する、貿易統計に依ると千九百二十九年以來年々入超を示してゐるが、このバラレスは貿易外の受取勘定である移民の送金又は船賃収入にて補つてゐる、更にギリシヤに對する外國資本の投下額を見ると、大體總計二千萬英貨磅であるがその内約三分の一は英國の資本である。外國爲替はこれまでは政府の嚴重管理の下に置かれて合計二十一ヶ國との間に清算協定が締結されて居たが、獨逸とのペーターは輸出入貿易の約三割を占めて居り、英國との貿易は輸出入平均して約一割程度であつた、全體ギリシヤの貿易の前途を検討すると必ずしも有望とは云へないのである。

茲に筆は多少脱線するかも知れないか、ギリシヤを一層諒解するためにその逸去を見ると、嘗て希臘の獨裁政治家メタクサス將軍がギリシヤの第一文明は古代に榮え、第二

文明はビザンチン帝國の華と咲き、今や第三文明國ギリシヤの建設に在ると云つたが、古代歴史は偕て置いてギリシヤ國は千五百四十年以來相當長き期間土耳其帝國の領土であつたのである、夫れが爲めオットマン・トルコの羈絆を脱するために屢々獨立を圖つたが成功が出来なかつたのである、彼のヴァイクトル・ユーゴーがギリシヤ人に頌辭を呈し、熱情の詩人バイロンは自ら劍をとつてギリシヤの獨立に参加し遂に千八百二十四年彼はミソロンギの土となつた程である、かやうな内に千八百二十七年英佛露は提携してギリシヤ問題を土耳其に干渉を試みたが土耳其の峻拒に依つて同年三國の聯合艦隊はナヴァリノ海戦に於て土耳其の艦隊を殲滅してからは英國は土耳其の崩壞の影響を恐れてギリシヤ干渉をやめたか露國は引續き軍事行動をなして遂に千八百二十九年あの有名なアドリアノールの和約となり、希臘はこれによつて完全なる自治が認められ更に千八百三十年に至つて英佛露の保障によつて完全なる獨立が認められてギリシヤは獨立宣言されたのである。かやうに

獨立した希臘は曩の世界大戰の初頭から國內は大紛糾となり、當時國王コンスタンチンは獨逸王朝の血統を享け又皇后はカイザーウイールヘルムの妹であつた關係上獨逸側に傾き、英傑ヴェニゼロスは英佛側に同情して聯合軍側の不敗を確信してこの見解の相違は千九百十七年にヴェニゼロスをしてサロニカに假政府を樹立せしめ志願兵を募つて軍隊を作り、英佛聯合軍支持の下に中歐帝國と對峙したのであつた、其後國王コンスタンチンは次男ジョージ親王に王位を譲つて退位したが急危崩御のため再び王位に復しヴェニゼロスは亦千九百二十年の總選舉に慘敗して仕舞つたのである。

千九百二十二年小亞細亞の遠征軍が土耳其國民軍のために敗北すると、その責を負ふて國王は退位し國內における王黨と共和黨の軋轢は絶へることなく、遂に千九百二十四年の三月に至つてギリシアは共和制體を採用することに決したのである、而して新憲法制定に着手して千九百二十八年末に漸く共和制體の憲法が發布されたのであつた、併

乍らギリシアは共和制度が布かれても王黨派と共和派との争鬪は絶へず其後復活したヴェニゼロスは共和制の守護者として千九百三十三年まで政權を掌握したが、千九百三十五年三月の軍隊革命は王黨派の復活を促進するの結果となつたのである。その後幾多の政争はギリシア政治の基本的の争ひである王黨派と共和派との鬪争を續けて、遂に千九百十一年に君主制憲法の復活を議決して、コンデイリス將軍指揮の軍隊警護の下に人民投票は九割五分の壓倒的多數を以て王政復活が承認されたのであつた。かくて復辟に依るジョージ國王は財政の整理、自由選舉國防の強化等を中心なる結論として、政黨に偏せざる内閣を組織することに勉めたがこれは容易に實現出来なかつたのである。この間に於てコンデイリス將軍や、クレタ島の梟雄と目されたヴェロゼロスの亡命地での病歿やデメルチスツアルダリス等のギリシア政界の元老が相亜いで世を去つたことは希臘のために一層の不幸を増したのであつた、千九百三十六年の四月にデメルチス逝いて其の後任にメタクサス將軍の内閣が



生れたが議會の停止、戒嚴令の施行、嚴重なる新聞雜誌の檢閱等獨裁政治を行つて彼は全體主義の線に沿つて政治を行つたのである。この獨裁宰相メタクサス首相が昭和十六年一月廿九日に急死したので、嘗てメタクサス首相の懇請

に依つて希臘國立銀行の副總裁から千九百三十六年に保健厚生相として入閣したる、アレキサンダー、コリジスが即日首相の印綬を受けて、爾來樞軸軍に對して必死の抗戦を續けて來たが昭和十六年四月十八日に享年五十七歳にして祖國の大患を前にして急逝したのであつた、この首相の急逝については種々の疑惑がかけられたるが當時イスタンプールD N B電に依ると、コリジス首相は最近ギリシヤ戦局の不利を頗る憂慮して、その責任感から懊惱をつづけて居つた事實から見て結局自決の方法をとつたと報せられてゐる。而してギリシヤ國王ゲオルグス二世は直ちに政界首腦を招集して後繼内閣組織について協議した結果、アテネ市長コジアスに新内閣組織を命じたが、組閣に失敗したので國王ゲオルグス二世は自ら内閣の首班となり、コジアスを副

首相として對獨戰遂行に重點を置いて親政内閣を組織してこの内閣を以て「勝利の内閣」と稱したが、ギリシヤは遂に國破れて政府は英國に亡命するの悲慘なる結果に陥つたのである。

### アルバニアの歴史産業交通の概況

アルバニアはバルカン諸邦の内でも其の人口は約百萬餘である小さな山國にして、この國の總面積は僅かに一萬六百平方哩に過ぎない有様である。交通機關に於ても二十世紀の今日なほ國內に一哩の鐵道も布設されて居らず道路の如きも僅かに四百料足らずと云はれてゐるのである。教育制度の如きも現在未だ一つの大學も設置されず只僅かに實業的専門學校と中等學校が四五校あるのみである。アルバニアの地形を見ると文化的に觀察しても最も恵まれない國であつて、西はアドリア海に濱してゐるが、港灣と名の附くものは一つもなく、耕地は僅かに海岸の狭い低地や、湖畔に設けられ又山岳部の高原や、谷々に存するのみで、その

他は多く山嶽地帯である。その間においてオリヴァの森林があるが、こゝには羊飼が住んでゐる。而して住民の生活は頗る低級にして先づ中世紀の農民の程度を脱却しない程である。云はれてゐる。かゝる状態であるから、勿論近代工業や其の他殖産興業の發達は殆んどなく、また農耕地はアルバニア總面積の八%に過ぎず、而して、この國は過去數十年に屢々戰亂の巷となつて住民は極めて悲惨なる生活をして居るに加へて、殖産興業が發達せざるため一般に貧弱であるに拘らず過去二千年來自國の言語、習慣、風俗等を保つてゐるのは山間地區に隱遁的な生活を營んで居たためであつて、其の結果住民の性質は孤獨的且つ非協力的なるものになつて仕舞ひ、アルバニアに於ては民族主義若くは國家思想等と云ふが如き普通觀念とは凡そ縁遠いものである。畢竟アルバニアは部族的の國家たるに過ぎないのである。租税及び徴兵等は不人氣の極に達し政府は全く贅物であると云ふことになるのである。

全體アルバニアは最も獵奇的に富む國であつて、これま

での歴史は幾多の消長を繰返したものであつたが、遂に千九百三十九年の四月に至つてこの國は伊太利に併合されてしまつたのである。而してアルバニアは人種的には歐洲最古のイルリア人及びスレシア人の子孫だと自ら誇示してゐるが、東羅馬帝國時代にはビザンスの支配に屬し、後にはセルビア人並にブルガリア人の攻略するところとなつたのである。然るに第十五世紀にゼオルヂ・カストリオタと云

ふ英雄が出現してアルバニアを統一して土耳其と闘つたが、この英雄の死後に至つて土耳其は漸くアルバニアを攻略することが出来たのであつた。第十九世紀にバルカンを襲つた獨立自由の風潮はアルバニアにも波及して千九百十二年は擾亂が起り、土耳其はアルバニアの自治を認めないのである。さり乍らイスマル・ケマル・ウロラは埃伊兩國の支持を得て獨立を布告した結果、列強は英京ロンドンに於て會議を開いてこの國の主權を認めて、ウイリアム公の國王の位に即かせることに決定したのである。而してウイリアム公は千九百十四年三月七日にドウラツツオに上陸した

が、間なく曩の世界大戦の勃發に遭遇して逃亡して仕舞つたので大戦終了までアルバニアは希臘、伊太利、オーストリア、佛蘭西等の軍隊に依つて次々に占領せられたが、彼のヴェルサイユ平和會議以後は伊太利の勢力が益々向上の一途を辿つて行つたのであつた、ゾグー王はアルバニアが千九百三十九年の春、伊太利が疾風迅雷の早業を以て併合さるるまで約二十年間、この國の政治を行つたのであるが、彼はアルバニアの有力なる會長の子として野心家で壯年時代には土耳其の舊都コンスタンチノープルの陸軍大學に學び、曩の世界大戦にはオーストリアの士官として參加したのであつたが、アルバニアの獨立を計畫して發覺しウィーンの獄舎に投ぜられたこともあり、平和締結後は放免されて歸國し千九百二十年には彼は内相兼司令官となり更に二ヶ年後には首相となつたのである。

千九百二十四年にはフアン・ノリー僧侶のゾグー驅逐の暴動に依つて彼はベルグラードに一時亡命したが、やがて彼は故國討伐軍を率ゐて歸國し別に政府を樹立して自ら大

統領となつたのである。更に千九百二十八年には伊太利の支持の下に彼は自ら國王となり、強權政治を實行したが、千九百二十七年に彼はハンガリーの伯爵の娘、ゼラルチン、アツボニーと結婚して一兒を儲けたがこれが伊太利のアルバニア侵略の二日前であつたことは面白いことである。兎も角アルバニアはゾグー王の統治期間は短いが、この進歩と開明の途を辿つてゐたことは事實である。現にゾグーが千九百二十五年の一月にアルバニア共和國大統領に就任してからは伊太利の支持を受けて伊太利の管理の下に國立銀行が設置され、又産業開發の先驅として交通上からとして伊太利の外債に依つて道路建設と橋梁架設計畫をなして、これがために伊太利の多數技師が雇傭されて道路布設等に從事し、また軍隊は全部伊太利教官の指導の下に訓練されたのであつた。千九百二十六年にイタリアとこの國との間に親和安全協約が結ばれたが、更に翌二十七年には防禦同盟條約が成立して以來、伊ア兩國の關係は益々緊密の度を加へて來り、石油開發の如きも伊太利の手に依つて行

はれたのであつた。かやうの關係にあつた伊太利は千九百三十九年の春に至つて果然態度は急角度に改まつてアルバニア港灣と空軍根據地の管理權、並に戰略的要地の守備權等を要求したのであつた。斯くて伊太利の海軍と空軍との掩護の下に伊の軍隊は續々とアルバニアに進入して當時英佛の抗議もアルバニア人の抵抗も何等一顧だに役立たずして、ソグーと其の一族は外國に亡命して王族を嫉む一部のアルバニア會長は王位を伊太利皇帝に献上してかくしてアルバニアは伊太利統監の下に新しき發足を見たのである。而して伊太利がこの地を熱望するのはアルバニアの戰略的地位がイタリアにとつては極めて重要なものである。即ちアトリア海の咽喉を扼して、この國も伊太利との最短距離は僅かに四十七哩である。この狹隘部にあるヴァロナ港は三方陸地に圍まれた港灣で、これ亦伊國にとつては必要な港灣である。かく觀察すれば伊太利の阿國併合は弱肉強食の自然的結果であつて、アルバニアの悲惨なる幕を下らして終焉を告げたのである。

想へば古來バルカンを制するものこそは歐洲大陸に覇權を握るものであるといはれてゐる、古くは東羅馬帝國が夫れであり、亦近世においてはオツマン帝國である舊トルコがこの地に君臨したが、今世紀に入つては帝政ロシア、獨逸帝國、奧國、洪帝國で何れもバルカンに驕足を伸ばさんとして戰禍を惹起したのである。就中奧國のバルカン政策がサラエヴォに於ける一彈となつて前大戰の發端をなしたことは未だ記憶に新たなるところである。勿論現在の諸事態は著しく變化してゐるが、バルカン半島が歐西大陸を繋ぐ陸橋であり、また大道である價値は少しも低減して居らぬのである。況んや樞軸側が最後の勝利を獲得するため馳て近東地方並に東地中海を完全制壓することは必至的條件である。茲に興亡三千年のバルカンの歴史を眺めて國家盛衰の跡を觀ると感慨無量のものがある。スバルタとアテネが繁榮を誇る以前に既にマセドニアは立派なる文化の花ほ咲いてゐたのである。アレキサンダー大王は亞細亞征伐の中途にして倒れたがその石棺は今尙ほ古代藝術の優秀なる形と

なつてコンスタンチノールの博物館内に安置されてゐる。羅馬が北方蠻族から攻撃されて都を東方に移して、こゝにビザンスが生れて東羅馬帝國の礎石が据ゑられたのである。ビザレスは皇帝の名に因んでコンスタンチノールと名付けたのであるが、この地は脚下にマルモラの蒼海を眺めボスポラスを隔て、亞細亞の山河は指呼の間に聞える。

しかも西は多島海を制し東は黒海を横切つて遙かに高加索に連なつてゐる誠にコンスタンチノールは歐亞の要衝であつて大帝國の都たるべき地であることが判明するのである……。東羅馬帝國實質的には純希臘人の帝國であつたが約千年の歴史は實に數奇を極めて歐洲の文藝復興に寄與したる功績や偉大なるものがある。千四百五十三年土耳其人が海峽を渡つてコンスタンチノールに迫つたときは東羅馬帝國は國運既に傾き所謂千年の久しきに亙つて東印蠻族の侵入を防いだビザンチン帝國はその盡すべき使命を完うして倒れたのであつた。これに代つて君臨した土耳其人はエジプト、アラビアから黒海沿岸一帯を占領してバルカン

を席卷して遂にハンガリー迄掌握したが、戰勝以外に歴史的に飾る何物も残して居ないのである。かくしてローマ帝國が亡びて以來バルカン半島は一應土耳其に統一されて中世の儘の姿で十九世紀を迎へたのであつたが、民族解放の渦巻が起つたのはその以後のことである。併乍ら前記したやうにバルカンの自然は地形的にも中心をつくつてゐないのみならず、政治的にも適當なる中心がなく、ために彼等は地方的に割據して、亦社會的に孤立して、その上に交通の不便が世界文運の進歩に惠まれることを阻まれて歐洲文明に取殘されて現在に至つた儘にて今次歐洲戰で大なる地圖の變化を見たのであるが、尙ほその前途に於て何所に行くかは吾人の注目すべき價値あるものと思はれるのである。(此稿終る)